

埼玉大学科学分析支援センター発足三十周年によせて

大学院理工学研究科博士後期課程 3 年 齋藤研究室 谷川 智春

埼玉大学科学分析支援センターが発足し、三十周年という記念すべき年を迎えられましたことに対し、心よりお慶び申し上げます。

さて、私が四年次に研究室に配属され、この埼玉大学科学分析支援センター(以下、分析センターと記します)の分析機器を使用するようになってから、かれこれ六年経ちました。この六年間を振り返りますと、測定環境が年を重ねるごとに飛躍的に改善され続け、今となっては不自由さを全く感じることはありません。六年前、四台あった NMR のうち、他核種の測定を行える機械は一台だけでした。もちろん、使用できる人は制約されており、誰もが自由に測定できると言える環境ではありませんでした。その後、この点が飛躍的に改善され、現在、学部生も他核種の測定をできるようになり、明らかに研究の幅が広がったように思えます。また、500 MHz の NMR が導入される前は、 ^{29}Si NMR の共鳴周波数が埼玉にあるラジオ局の周波数と重なるという理由で測定することができませんでした。ケイ素化合物を扱っていた私は、学会において「なぜ、 ^{29}Si NMR の測定をしないのですか?」と質問され、上で述べた事情を幾人にも説明し、悔しい思いをしたことを覚えています。ですから、500 MHz の NMR が導入されると聞いた時には子供のよう喜び、 ^{29}Si NMR のチャートを手にした時には非常に感動した覚えがあります。このように、この分析センターが発展し続けられるのも、スタッフの方々と我々ユーザーが密なコミュニケーションを図り、常に良い測定環境を築き上げようと努力してきたからだと思います。確かに、昨年から今年にかけて、国の補正予算の関係で高性能の分析機器が購入され、それが理由で測定環境がさらに充実しました。しかし、いくら良い機械が揃っても、無秩序に使っては、荒んだ測定環境になるのは容易に予想されます。新規分析機器導入の際に、多大な時間をかけて分析センターのスタッフの方々と先生方が使用規定の作成に取り組んでおられました。私はこの姿を拝見し、この分析センターのみならず、埼玉大学全体が学生のことを第一に考え、そのことに関して常に真剣であることを再認識することができました。我々学生は、現在置かれている環境がいかに恵まれており、たくさんの方々による努力の賜物であるということを、この三十周年を機に認識するべきであると思います。また、このように測定環境が整っているわけですから、これまでは技術的な面から出来なかった、もっと革新的な研究ができるはずです。我々は、現状に甘んじることなく、さらに独創性に富んだ研究を行い、それを学術雑誌や学会を通して世界にたくさん発信することが、この分析センターへの恩返しになるのではないのでしょうか。

最後に、このような立派な分析センターが今後もさらなる発展を遂げ、日本のみならず、世界が注目するような研究が行われて行くことを祈念しております。